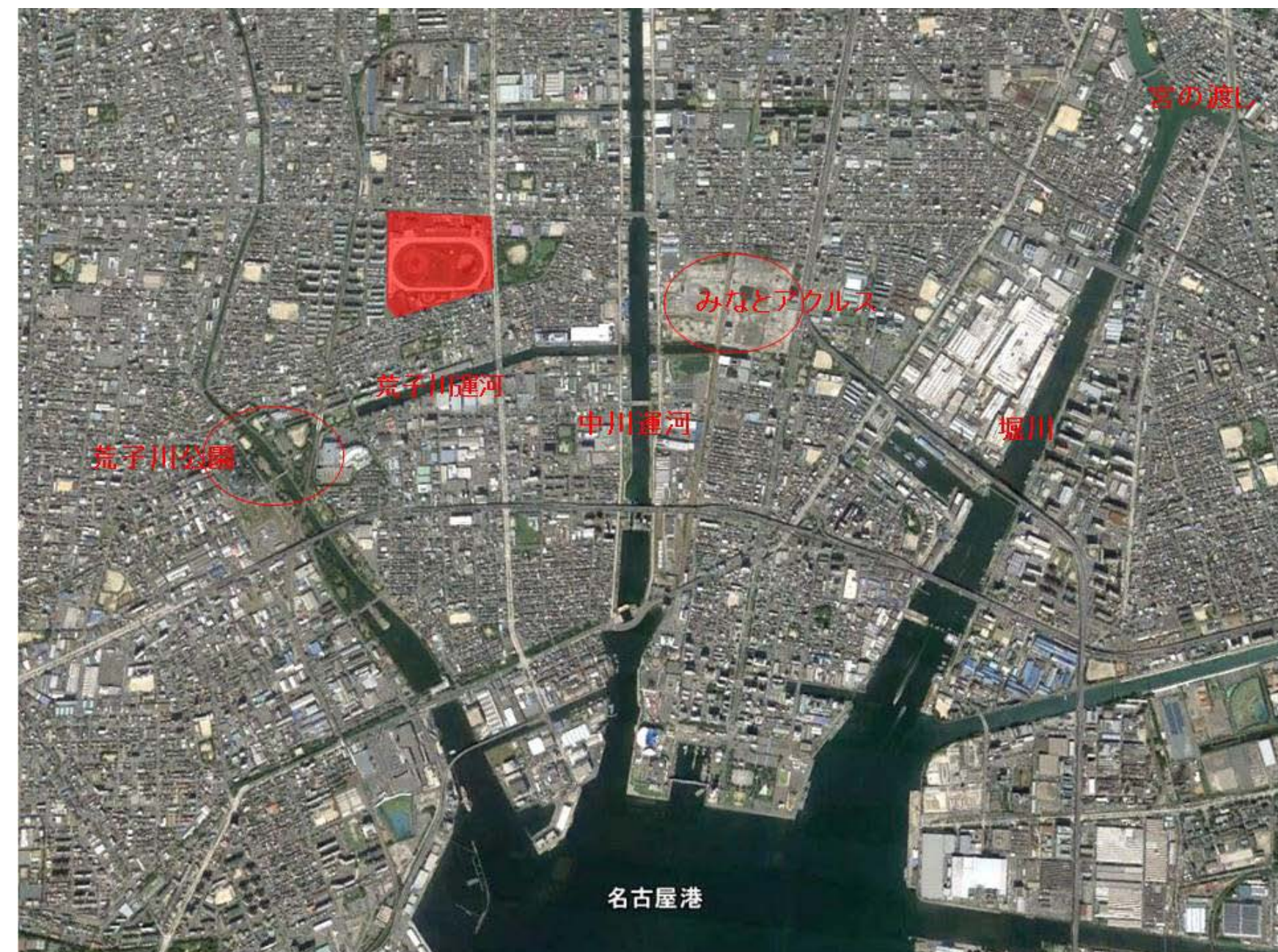


「選手村」から「森の中のハウジング」へ！

選手村の立地

中川運河の再生・みなとアクルス完成等続く新しい地域づくりの起爆剤として大変効果的であり、更には中川運河と交差する荒子川運河の再生が実現することにより、港周辺の魅力度アップにつながる。



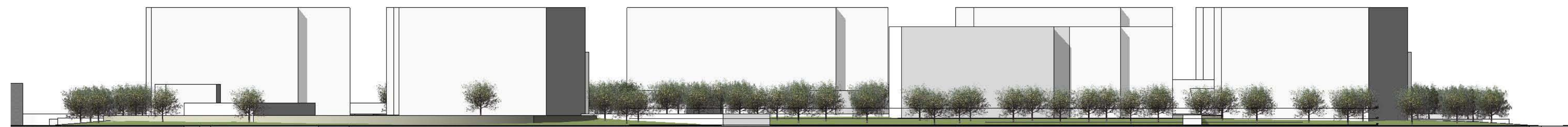
敷地の整備

敷地面積約 20ha の当敷地の懸念材料として、名古屋市津波ハザードマップによると、「あらゆる可能性を考慮した最大クラス」の場合の浸水深さが 1.0 ～ 2.0 m であり、地盤を 2.0m 嵩上げをする。また建物周辺は人工地盤として下部を駐車場等に利用する。



一過性（僅か 16 日間）のアジア競技大会が最終目的ではなく、この大会を切っ掛けとして“みなと”周辺のイメージアップのための起爆剤として、「街づくり」を考える。

津波対策として敷地地盤を 2.0m（中央では 3.0m）嵩上げし、テーマを「森の中のハウジング」として緑一杯の森の中に住宅棟が建ち隣接公園とも一体化した、地域に開放された魅力ある公園の様な計画とする。また予測される大規模地震時の避難施設の機能を持つ。



選手村

各競技の開始日に合わせて選手の入村があり、それを考慮して収容人数 15000 人を 12000 人に削減！

- ・ハウジング 3LDK 規模（75 m²）ー 8 人宿泊可能
13000 人の内 7000 人宿泊とすると
3LDK ー 約 900 戸必要
- ・ハウジング 2LDK 規模（60 m²）ー 6 人宿泊可能
13000 人の内 5000 人宿泊とすると
2LDK ー 約 850 戸必要

- ・必要個数 1750 戸を階数 11 ～ 12 階程度で 20ha の敷地へのレイアウト図を下記に示す。
- ・トレーニングセンターは大会終了後小学校に転用。

森の中のハウジング

3LDK ー 900 戸 + 2LDK ー 850 戸 合計 1750 戸のハウジング人口は、現在の世帯平均人数 2.49 人を前提とすると 4360 人となり小学校が必要となる。勿論、利便性を高める為の必要を施設を設ける。

- ・津波対策の地盤嵩上げにより、地震時発生の際周辺住民の安全な避難場所として利用可能。
- ・隣接の老朽化した市営住居棟の建替えに伴う仮住まい又は移住にも対応可能とする。

*** 行政資料によれば、選手村仮設整備費 300 億円とあるが、15000 人を 13000 人に規模縮小しても大変厳しいため、PFI を含めた民間のノウハウを含めた事業手法の検討が必要。**

